

邪神を受胎せし英雄の娘

……その男にとって聖ステファン王国という存在は、怒りと憎しみの対象でしかなかった。

男の名はバルドリッジ・シンクレアといった。聖ステファン王国の辺境に位置する貧しい村に生まれ、幼少時より、その醜い容姿を周囲の人々に笑われながら育ってきた。

男の顔つきは、ひと言で言い表すならば、ゴブリンの顔を酸で焼いたような顔である。彼の両親は普通の顔つきであったため「母親がゴブリンと姦通したからあのような醜い子どもが生まれたんだ」という噂を流されたこともあり、そのことを苦しめた母親は、バルドリッジが五歳の時に自殺している。母親の死後、父親はバルドリッジを育てることを拒否し、彼を教会に捨て去った。

教会で保護されたバルドリッジは、教会が運営している孤児院に預けられた。彼はそこでも周りの子どもたちから容姿について馬鹿にされ、嘲笑され、気味悪がられたが、神父のガルヴァンだけは違っていた。彼はバルドリッジが容姿に関係なく、自分に自信が持てるよう、何か一つでも特筆すべき才能がないかと探した。その結果、バルドリッジは魔法の才能に秀でていることを、ガルヴァン神父は発見したのである。

ガルヴァン神父の指導の下、バルドリッジはメキメキと魔法を上達させていき、孤児院を出なければならぬ年齢に達した

時、彼は攻撃・防御・回復・異常・召喚といった系統の魔法をほぼ極めてしまったのである。ガルヴァノ神父は、そのことを誰よりも喜んだ。

施説を後にしたバルドリッジはあてのない放浪の旅に出た。彼は最初、国の行政機関か地方領主の下で自分の力が生かせないか模索したのだが、醜い容姿が災いしてその願いは叶わなかった。バルドリッジは他にも、裕福な商人や富豪の下を訪れ、自分の力を売り込んだのだが、やはり容姿が原因で雇われることはなかった。

生きていくためには金を稼がなければならないのが世の常である。たちまち路銀が底を尽いたバルドリッジは、人々を苦しめる魔物や盗賊を退治することで日銭を稼ぐことにした。バルドリッジの力の前には、どんなに恐ろしい魔物も、狂暴で数多い盗賊たちも敵ではなかったのだ。これが後に思わぬ出会いを招くことになる。

当時、聖ステファン王国は、国境を接する「追放の地」に巢食う邪神とその眷属による攻撃に悩まされていた。国王のモンテカロライナ七世は、度々軍隊を派遣して「追放の地」を攻撃するのだが、派遣された軍隊はその度に敗走を重ね、犠牲者は増すばかりであった。

数の力では邪神とその眷属に勝てないと考えたモンテカロライナ七世は、少数精鋭を派遣することによってこの事態を打破することを考えた。そして、国中から腕の立つ騎士や戦士、賢者や錬金術師、そして魔術師が集められたのだが、その中にバ

ルドリッジも含まれていたのである。彼の日頃の行いが声価を高め、その実力が国の中枢にまで伝わっていたのだ。

バルドリッジの実力は、集められたメンバーの中では桁外れであった。しかし、集められたメンバーは、彼をパーティーから外すよう求めた。バルドリッジの容姿が醜悪であるため、士気の低下を招く恐れがあるから、というのが理由であった。バルドリッジは去っても良かったのだが、ガルヴァノ神父の顔が脳裏を過ぎった結果、彼は仮面を付けて顔を隠すことを条件にパーティーに残留することが決まったのだった。

邪神を討伐するため、「追放の地」へと足を踏み入れた一行は、そこでこれまで遭遇したことがなかった狂暴で凶悪な魔物たちと相次いで遭遇する。その結果、一六人いたメンバーは、戦死、逃走、離脱、戦意喪失によって次々と減って行き、邪神の巢窟に辿りついた時にはバルドリッジひとりだけになっていたのである。

バルドリッジはそこで邪神との一騎打ちを演じ、死闘の末、これに勝利する。それは激しい戦いであり、バルドリッジと邪神の戦いによって、巢窟を中心とした半径一五リーグ（一リーグ、二・五キロメートル）四方が灰燼に帰してしまったほどだった。

邪神は塵となって滅びる間際、仮面が壊れた彼の顔を見て、ニヤリと笑った。

「才前ノ奮戦ニ敬意ヲ評シテ、一度ダケ我ヲ呼ブ権利ヲヤロウ。マタ相見エル時マデ、サラバダ。醜キ勇者ヨ」

と言葉を残して。

邪神に勝ったとはいえ、力を使い果たし、慢心創痕となったバルドリッジは、その場に倒れ、動けなくなってしまった。それでも、自分の偉業を誇りに想い、これによって未来が開けると思っただけで笑ったのだが、その直後、彼は地獄に墮ちることになる。

逃げ出した仲間たちが、いつの間にか彼の周りに集まっていたのだ。彼らは、バルドリッジと邪神の戦いを遠くで目撃しており、そしてバルドリッジが勝ったことを知っていた。そして、その勝利を祝福するために戻ってきたのではなく、奪うために戻ってきたのだった。

力を使い果たし、動けないバルドリッジに抗う術はなかった。彼は地面に横たわったまま身体を切り刻まれ、連続して殴打を浴び続け、最後、自分のことを最も嫌っていた剣士のベルモントによってトドメを刺された。ベルモントが強大な魔物の襲われた時、彼の前に立って守ったのがバルドリッジであった。その報酬が、大きな石となって頭に降ってきた時、バルドリッジはぐしゃりという音を直で聞いた気がした。

頭を割られ、中身が見えている状態のバルドリッジだったが、それでも彼はまだなんとか生きていた。だが、かつての仲間たちは彼が死んだものと思ひ込み、彼をその場に放り捨てて去っていった。これはバルドリッジにとって不幸中の幸いであったに違いない。

バルドリッジはしぶとくも、長い時間をかけて回復すると、

身体を引きずるようにして「追放の地」を後にした。そして、故郷である聖ステファン王国に戻ると、そこで衝撃の事実を知ったのである。

なんと、自分を殺したかつての仲間たちが邪神を倒した勇者としてその偉業を讃えられ、バルドリッジは戦いの最中に邪神側に寝返った卑劣な裏切り者として扱われていたのである。そして、裏切りの罪として、かつて彼を育ててくれた孤児院が焼き払われ、育ての親であるガルヴァノ神父は投石による死刑に処されていたのだった。その蛮行を主導したのは、自分にトドメを刺したベルモントであった。

この瞬間、バルドリッジの頭の中で何かが切れる音がした。

「そうか………」

バルドリッジは静かに呟いた。彼は怒りに震えて、拳を硬く握りしめた。

「そうか……みんなそんなに俺が憎いのか。だったら、もつと憎まれてやる。もつともつと憎まれてやる。そして、この国を地獄に変えてやる！」

全身に怒りと憎しみをたぎらせて、バルドリッジは聖ステファン王国を後にした。そして、再び「追放の地」へと戻ったバルドリッジは、そこを拠点として魔物たちを操る術を学び、聖ステファン王国を滅ぼす算段を立てはじめた。そして、彼は後に、「魔王」と称して聖ステファン王国に襲いかかることになるのだが、それはまだ先の話であった……。

続きは本編にて